

# 環境へのこだわりは品種の開発から —近江米新品種「きらみずき」が本格デビュー—

主席研究員 河原林孝由基

## 1 琵琶湖と共生する農業

この秋、滋賀県で品種開発された近江米の新品種「きらみずき」が本格デビューした。コシヒカリと同等以上の良食味で高温条件下でも品質・収量が安定した栽培が見込めるなかで中生の品種で、その最大の特徴は栽培方法を「オーガニック栽培」と「化学肥料や殺虫・殺菌剤を使用しない栽培」に限定している点だ。このような厳しい栽培基準を県域で設けるのは全国初である。

滋賀県の水田面積は46,500haで耕地面積の93%を占めている(水田率は富山県に次いで全国2位。以降、数値は2023年時点)。県は2003年に条例を制定し、琵琶湖をはじめとする豊かな自然環境と共生し安全安心な農産物を届けることを目的とした「環境こだわり農業」の取組みを積極的に推進している。化学肥料・化学合成農薬の使用量を通常の栽培の5割以下に削減し、琵琶湖への濁水の流出を防止するなど環境負荷を減らす技術で生産するもので、環境保全型農業直接支払交付金(注1)(県独自の地域特認取組を数多く用意)等も活用して支援している。県では認証制度を設けブランド化に努めており、こうした一連の施策の展開によって、水稻では県全体の作付面積の概ね半分が「環境こだわり農産物」として栽培されるに至っている。また、環境保全型農業の取組みとして直接支払交付金の実施状況をみても滋賀県は北海道に次いで全国2位であり、耕地面積に占める割合では突出している。「琵琶湖は私たちの生活を映す鏡」

として、連綿と続く琵琶湖と共生する営みとその暮らしの中で、農業者をはじめ県民には高い環境意識、社会意識が育まれており、それが民意となって一連の施策を支えている(注2)。

## 2 環境にこだわった品種開発

23年は年平均気温が観測史上最も高い一年となった。気候変動の影響により、これまで経験したことのない猛暑や豪雨・長雨、台風の巨大化など自然災害の発生頻度が増していくことは言をまたないが、農業生産面においても農産物の生育障害や品質低下等といった影響が全国各地で出現している。地球温暖化の要因である温室効果ガスの排出を削減する対策(緩和策)はもとより、併せて気候変動の影響による被害の回避・軽減対策(適応策)にもこれまで以上に取り組んでいく必要がある。

とくに夏場(6月～8月)は記録的な高温となり、水稻では登熟期の気温が高すぎて品質・収量が低下する「高温登熟障害」が多くの県で認められた。その代表的なものとしては、イネが出穂期以降の高温・寡照等によって玄米が白濁する「白未熟粒」の発生が前年より多く全国の5割程度となり、高温・少雨で胚乳部に亀裂が生じる「胴割粒」の発生、粒の充実不足等といった影響があった。結果、令和5年産の一等米比率は多くの県で低下した。一方、高温耐性品種の一等米比率は、多くの県で県平均を上回っており、高温年での品質・収量の低下を抑える気候変動の適応策と

してその導入効果が期待されている(農林水産省「令和5年地球温暖化影響調査レポート」)。

高温耐性品種としてはこれまで滋賀県では収穫時期が8月末～9月頭の早生品種で全量が「環境こだわり農産物」として生産される「みずかがみ」を開発しているが、収穫時期が9月中旬の中生品種では「日本晴」などが中心で登熟期に高温や長雨、台風による影響を受けやすく品質・収量が低下するケースが増えていた。そこで県農業技術振興センターでは高温登熟性や耐倒伏性(短稈種)<sup>たんかん</sup>にも優れる新品種の開発に着手し、「みずかがみ」以来10年ぶりとなる新品種「きらみずき」を誕生させたのである。本格デビューに13年の年月を得たが、品種開発にあたっては水稻作付面積の半分が「環境こだわり農産物」として栽培されていることから「環境こだわり農業」の栽培方法を出発点(前提)に環境に負荷を与えない栽培と良食味を追求し、育成・改良を重ねた。中生品種の「きらみずき」の登場によって、「みずかがみ」、「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」といった早生品種との作期分散(作業負荷や気候変動リスクの分散)が図れることも期待される。

(注1)当該制度等詳しくは河原林孝由基(2023)「環境保全型農業についての政策の射程と動向—みどり戦略との一層の統合的展開を期して—」『農中総研調査と情報』web誌、7号を参照されたい。  
<https://www.nochuri.co.jp/report/pdf/nri2307re10.pdf>

(注2)このような県民意識の醸成について河原林孝由基(2021)「『森・川・里・湖』が織りなす持続可能な暮らし—滋賀県農業の“みらい”的な取組みが始まる—」『農中総研 調査と情報』web誌、5号で紹介している。  
<https://www.nochuri.co.jp/report/pdf/nri2105re5.pdf>



写真 「環境こだわり米」用デザイン(左)、「オーガニック米」用デザイン(右) (出所 滋賀県ホームページ)

### 3 持続可能な農業のシンボルへ

滋賀県では県下JAグループをはじめとする集荷団体を通じて大手量販店で販売する仕組みを構築し、既にオーガニック近江米「オーガニックこしひかり」や「環境こだわり農産物」の「みずかがみ」等を店頭販売している。これに今回、新品種「きらみずき」が加わり、県内スーパー・マーケットなどでの販売が実現し本格デビューを果たした。販売パッケージのデザイン(写真)は統一し、店頭販売向けに精米袋を用意している。

くしくも「琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業(琵琶湖システム)」は国連食糧農業機関(FAO)で「世界農業遺産」に認定され、「環境こだわり農業」はその中心的な取組みとして位置づけられている。琵琶湖システムを支え、気候変動対策や生物多様性保全に貢献するフロントランナーとして新品種「きらみずき」が持続可能な農業のシンボルとなり「環境こだわり農業」が一層深化(進化)することを期待してやまない。

(かわらばやし たかゆき)